

子宮頸がん予防ワクチン(HPVワクチン)接種説明文

事前に、この説明文やリーフレット等をよく読んで、理解し、疑問などがあれば、かかりつけ医や江別市保健センターに確認し、十分納得した上で接種することを決めてください。

【保護者の同伴について】

16歳以上の方の子宮頸がん予防ワクチンの接種については、保護者の同意は必ずしも必要ありません。予防接種を受けるかどうかは本人が判断してください。(保護者自署は不要です。)

1 ヒトパピローマウイルス(HPV)と子宮頸がんについて

ヒトパピローマウイルス(HPV)は、皮膚や粘膜に感染するウイルスで、性行為を介して生殖器粘膜に侵入して感染し、女性の50%以上が生涯で一度は感染すると推定されています。

HPVに感染しても、多くの場合ウイルスは自然に検出されなくなりますが、その一部が数年～数十年間かけて前がん病変(異形成)の状態を経て、子宮頸がん等を発症します。

2 ワクチンについて

HPVワクチンには「2価サーバリックス」・「4価ガーダシル」・「9価シルガード9」※1の3種類があります。WHO(世界保健機関)はその有効性と安全性を確認し、性交渉を経験する前の10歳代前半に接種することを推奨していますが、それ以降の接種でも有効性が確認されています。医療機関により取り扱うワクチンが異なりますので、どのワクチンを接種するかは予約の際にご確認ください。過去に受けたワクチンが不明の場合などは接種医にご相談ください。※1 令和5年4月から定期接種に追加されました

3 9価(シルガード9)HPVワクチンの接種回数と交互接種について

15歳以上の接種は3回接種となります。同じ種類のHPVワクチンで接種を完了することが原則ですが、既に2価サーバリックス・4価ガーダシルを接種した方が、9価シルガード9により残りの接種を希望する場合、交互接種における安全性と免疫原性が一定程度明らかになっていることや海外での取り扱いを踏まえ、医師と被接種者等がよく相談のうえであれば、接種は可能です。

4 予防接種を受けることができない方

予防接種は体調の良いときに実施することが原則です。体調に不安がある場合はかかりつけ医に相談してください。また、以下の場合は予防接種を受けることができません。

- (1) 明らかに発熱(通常37.5℃以上の場合をいいます)している方
- (2) 重篤な急性疾患にかかっている方
- (3) このワクチンに含まれる成分でアナフィラキシー様症状(ショック症状、じんましん、呼吸困難など)を起こしたことがある方
- (4) その他、医師が予防接種を行うことが不適当な状態と判断した場合

5 予防接種を受ける際に、医師とよく相談しなければならない方

- (1) 心臓血管系疾患、腎臓疾患、肝臓疾患、血液疾患、発育障害などの基礎疾患のある方
- (2) 過去に予防接種で、接種後2日以内に発熱・発疹・じんましん等アレルギーを思わせる異常がみられた方
- (3) 過去にけいれん(ひきつけ)を起こしたことがある方
けいれんの起こった年齢、そのとき熱があったか、熱がなかったか、その後起こっているか、受けるワクチンの種類などで条件が異なります。必ずかかりつけ医と事前に相談してください。
- (4) 過去に免疫不全の診断がなされている方及び近親者に先天性免疫不全症の者がいる方
- (5) ワクチンにはその精製過程における培養に使う酵母の成分、金属、抗生物質、安定剤などが入っているものがあるのでこれらにアレルギーがあるといわれたことがある方
- (6) 妊娠している方または妊娠の可能性のある方

(裏面へ続く)

6 予防接種後の注意事項

- (1) まれに、接種直後から30分以内に失神発作を起こすことがありますので、接種後少なくとも30分間は、背もたれのある椅子などに座って様子を見てください。
※注射への恐怖心をきっかけに、接種後に失神することがあります。
- (2) 接種当日は激しい運動は控えてください。また、接種部位は清潔にしてください。
- (3) HPVワクチンは筋肉注射なので、他のワクチンより痛みを生じる可能性があります。接種直後から強いしびれや痛みが現れた場合は、すぐに医師に相談してください。その他副反応や気になる症状が現れた場合もすぐに医師に相談してください。

7 予防接種の副反応について ※下記のホームページや各リーフレットなどもご確認ください。

発生頻度	サーバリックス（2価）	ガーダシル（4価）	シルガード9（9価）
50%以上	疼痛、発赤、腫脹、疲労感	疼痛	疼痛
10～50%未満	かゆみ、腹痛、筋痛、関節痛、頭痛など	腫脹、紅斑	腫脹、紅斑、そう痒感
1～10%未満	じんましん、めまい、発熱など	かゆみ、出血、不快感、頭痛、発熱	出血、発熱、頭痛、悪心、下痢など
1%未満	注射部位の知覚異常、感覚鈍麻、全身の脱力	硬結、四肢痛、筋骨格硬直、腹痛、下痢	四肢痛、腹痛、感覚鈍麻、倦怠感、嘔吐など
頻度不明	四肢痛、失神、リンパ節症など	疲労、倦怠感、失神、筋痛、関節痛、嘔吐など	疲労、内出血、血腫、硬結、失神、めまい、関節痛・筋肉痛、重いアレルギー、神経系の症状など

稀に報告される重い副反応としては、アナフィラキシー様症状（ショック症状、じんましん、呼吸困難など）、ギラン・バレー症候群、血小板減少性紫斑病（紫斑、鼻出血、口腔粘膜の出血等）、急性散在性脳脊髄炎（ADEM）等があります。副反応は一時的で、徐々に改善していくことが多いですが、改善しない場合や重篤な場合は、接種した医療機関の医師や周りの大人に相談してください。

※ワクチン接種後に知覚的・運動に関する症状（頭痛や関節痛等）、自律神経に関する症状（倦怠感、めまいなど）、認知機能に関する症状（記憶障害、学習意欲の低下など）など多様な症状が報告されています。これらの症状は、専門家によれば何らかの身体症状はあるものの、検査では異常所見が見つかからない「機能性身体症状」と考えられています。また、HPVワクチン接種歴のない方にも、同様の症状を有する方が一定数存在することが明らかとなっています。このような報告を受け、様々な調査研究が行われていますが、ワクチン接種との因果関係は証明されていません。

8 予防接種による健康被害救済制度について

定期の予防接種によって引き起こされた副反応により、医療機関での治療が必要になったり、生活に支障が出るような障がいを残すなどの健康被害が生じた場合は、予防接種法に基づく給付を受けることができます。ただし、その健康被害が予防接種によって引き起こされたものか、別の要因（予防接種をする前あるいは後に紛れ込んだ感染症あるいは別の原因等）によるものなのかを国の審査会にて審議し、認定された場合に給付を受けることができます。

※給付申請の必要性が生じた場合は、診察した医師、江別市保健センターへご相談ください。

9 20歳になったら子宮頸がん検診を受けることが大切です

ワクチン接種を受けた場合でも、免疫が不十分である場合や、ワクチンで防げないタイプのウイルスもあります。20歳を過ぎたら2年に1回、必ず子宮頸がん検診を受けましょう（別紙チラシをご覧ください）。定期的に検診を受ければ、がんになる過程の異常（異形成）やごく早期のがんの段階で発見できることが多く、経過観察や負担の少ない治療で済む場合が多くなります。

↓ HPVワクチンについて詳しい情報は各ホームページをご覧ください。

厚生労働省ホームページ



江別市ホームページ



お問い合わせ先
江別市保健センター
Tel. 385-5252